

縄文時代石皿・台石類、磨石・敲石類の検討

—出土状況から見た上石・下石の組み合わせ—

上 條 信 彦

1. 本稿の目的

縄文時代の食料加工技術を探るうえで、その加工具の内容を解明することは重要である。特にドングリ類やトチ、クリ、クルミなどは遺跡での検出例から縄文時代の主要なエネルギー源と考えられており、その加工技術の解明は狩猟・採集社会の実態を知るうえでも重要である。これら食料資源には、殻剥きだけでなく、ドングリ類の一部やトチはアク抜きのための粉砕が不可欠なものがある。本稿の対象である石皿・台石類、磨石・敲石類は、縄文時代を通じて石器組成比にしめる割合が高く、植物質食料の殻剥きや粉砕などに用いられたと考えられている。一方、先史時代の農耕社会においても、農作物の加工に調整や粉砕が不可欠であり、その加工具として磨棒と磨盤が存在する。この2つの道具は、狩猟・採集社会段階から発展してきた道具と考えられており、農耕技術の発展過程を捉えるための資料として注目されている。縄文時代の議論においても、野生植物質食料だけでなく農耕の存否に関する議論のなかで機能・用途論が長く取り上げられ続けている。しかし、磨棒と磨盤は形態上その組み合わせと使用法が比較的明瞭であるのに対し、石皿・台石類、磨石・敲石類は形態や使用痕跡が複数あり、さまざまな機能と用途が推定されているため、上石と下石の組み合わせに関する議論が低調となっている。

このような中、筆者はこれまで各地域・時期における石皿・台石類、磨石・敲石類の組成比を検討してきた(上條 2007a・b)。そのほか、上石と下石との関係を探るには、遺跡からの共伴例(一括資料)の検討が有効な方法といえる。したがって、本稿では、上石と下石の共伴例を検討することによって、各形態の上石と下石との関係性を明らかにしていきたい。出土状況について着目した先駆的な論考に小林(1978)がある。小林(1978)は「平坦な磨面を持つ縦長の磨石はものの叩き割り、搗き碎きに使用され、その使用法は平坦な石皿の上で上下の垂直運動および前後の水平運動を主として行ない、作業をしていたのではないかと思われる。一方、全面に磨痕の残る円形・楕円形磨石は、中央部に円や楕円あるいは溝状の凹みのある石皿とともに使用され、石皿上で円・楕円あるいは前後の水平運動を行なって、ものの磨り潰しに使用したのではないか」と述べ、すでに形態差による道具の使い分けの可能性を述べている。田村博は、小林の事例を考慮したうえで、上石と下石を上石の動きに注目して分類の提示を行なっている(田村 1998・2001)。小林(1978)の時の検討数は15遺跡18例であり、その地域は中部高地と関東だった。その後、民具の組み合わせ(主

にトチの皮むき石)を参考として、遺跡出土のセット例が注目される(橋口 1982)。弥生時代については、浜田(1992)によって関東地方を中心とする集成がなされ、上石と下石のセットパターンが見出されている(浜田 1992)。弥生時代の遺跡には、遺物の大量投棄が認められず、資料の帰属時期が判断しやすい住居址や、火災を受け資料の残存状況の良い住居址が多く検出されることから、セット関係を見出すには有効な資料といえよう。

縄文時代については、小林の論考以後、30年以上経った。しかし、調査例の増加にも関わらず、出土状況を考慮した論考は少なく、小林の述べた説についての補強や再検討は皆無に等しい。その理由のひとつに、調査者の認識の違いだけでなく、出土状況がはたして使用当時の状況を示しているかという遺跡形成の問題がある。また、破損した石皿が多い点や祭祀遺構や炉石などへ再利用の例から、石皿や磨石は本来の役割が終了すると、廃棄行為によって使用当時の状況とは異なる出土状況を生み出すと考えられてきたためである。多くの遺跡は、自然災害などで瞬間的に埋没しない限りは、何らかの営為による遺物の移動が予測される。ただし、遺構のなかには、一括出土例も少なからず認められるほか、偶発的かもしれないが完形の上石と下石のセットが見いだせる場合もある。特に、現在資料増加によって、従来の形態的特徴の関係だけでなく、使用痕の組み合わせもふまえた議論が期待される。

したがって、ここでは、石皿・台石類、磨石・敲石類において一括性の高い事例がないか検討し、出土状況からの上石と下石のセット関係の規則性を見出したい。特に本稿では、形態面だけでなく、使用痕の対応関係にも注目しつつ検討してみたい。

2. 出土状況の検討方法

共伴例を検討するにあたって、遺物の発見までに人為的・自然的な作用によって遺物が移動してしまう可能性がある。このことを考慮し、下記のような平面的に使用の同時性の高い条件を設定した。

- ①遺構内あるいは自然・人為的移動の影響の少ない層位で出土していること。特に遺構内の場合、住居の切りあいや再度の掘り返しなどの痕跡が認められないこと。
- ②床面直上あるいは包含層底面といった上石・下石とも同一層位から出土していること。
- ③上石と下石が関連する位置で出土していること。具体的には下石を中心に一般的に手の届く範囲である半径1m内に上石が検出された場合を取り上げた。また、出土状況において集石内などではなく、他の遺物などから使用時の状況のある程度反映した出土例を取り上げた。

石皿・台石類、磨石・敲石類の分類については、上條(2007b)に従い、図1に示した。

以上の条件のもと、96遺跡121例を集成した(表5)。内訳は、草創期2例、早期19例、前期32例、中期35例、後期24例、晩期2例、複数期5例である。各時期の遺跡数と比べると、中期が少なく、早期と前期、後期が多い傾向にある。これは中期に複数型式にわたる長期存続の集落が多く、遺構

大別形状	I類【狭義の台石】(採集礫をそのまま使用)			II類【狭義の石皿】(凹部を形成)		
形状	凸	平	凹	A	B	C
模式図						
平面形	不定形	不定形	不定形	定形・不定形	定形	不定形
断面形	凸形の盛り上がり	平坦面	使用による凹み	不定形な凹部を形成	縁部を整形	幅12cm程の長方形の凹部

使用痕の平面的広がり

a	b	敲
狭く集中	広く均一	敲打痕

1. 石皿・台石類

大別	I類(採集礫をそのまま使用)										II類(採集礫を整形)		
礫形状	円礫・楕円礫										特殊磨石	ハンマーストーン	
使用痕	磨	磨+磨	磨+敲	磨+磨	凹	凹+磨	凹+敲	凹+磨	凹+磨	凹+磨	特殊磨石	ハンマーストーン	
模式図													
備考	狭義の磨石			石蝕形			凹石			石蝕形			叩石

器種	扁平石器	スタンプ形石器	北海道式石冠
模式図			



2. 磨石・敲石類

図1 石皿・台石類、磨石・敲石類の分類

表1 総計

上石分類 \ 下石分類	I類							II類		剥落	不明	系列別			
	磨	磨+磨	磨+敲	凹	凹+磨	凹+敲	特殊磨石	扁平	北海道式石冠			磨耗系	凹系	側面磨耗	側面敲打
I凸a	6	3		4	4				1		2	9	8	7	
I凸b	4		1	1		1	1	1		1		4	2		1
I凸	3		1	3							2	4	3		1
I平a	7	3		5								10	5	3	
I平b	6		1		1		17	1	1		1	7	1	1	1
I平	3			1	1		3	2	3			4	2	1	1
I凹a	6	4(石1)	2	2					2			11	2	3	2
I凹b	3			1			1	4				3	1		
I凹	1	1(石1)		1							1	2	1	1	
I凸敲				1	1	1							3	1	1
I平敲				1									1		
II A	7	2(石1)		6	2						1	9	8	4	
II B	1	1(石1)										2		1	
II C	5			1	1							5	2	1	

註1：(石)は事例数のうち石蝕形の事例数を示す(以下、同じ)。

註2：事例の中で複数のまとまりが認められるものは各々数えた。例えば、I凸類の台石と凹類、磨類の上石1点ずつの場合、I凸類と凹類、I凸類と磨類それぞれに加算した。

に切りあいがあるほか、埋没時の遺物の大量投棄例や流れ込み例も多く、上記条件に該当するものが少なかったためである。また、遺構の特徴をみると、焼失住居からの検出例が比較的多い。

なお、報告書において出土状況の記載が略される場合や、出土状況についてドットのみで示された場合、写真図版以外で上石と下石の対応を検索することは困難であった。そのため、調査者の出土状況についての認識や記録法の違いも課題である。その点、草創～早期の事例は、住居址などの遺構が少ないため、包含層での遺物の散布状況に重点が置かれた場合、共伴例が把握されやすく、検討数が増加した。

3. 検討の結果

(1) 草創～早期 (表2) (図2・3)

上石と下石の組み合わせを示唆する最も古い例は、種子島に所在する三角山Ⅰ遺跡例(図2-1)で、草創期隆帯文土器期に属する。下石は大型の板石、上石は長さ10cmほどの亜角礫が用いられている。使用痕はいずれも磨耗痕である。下石はⅠ平b類、上石は磨類に該当する。磨耗痕は不明瞭で変形するほどまでは磨耗していない。磨耗痕は、下石の表・裏面の一部、上石の表面にわずかに観察できる。上石は下端部に若干の敲打痕が認められる。光沢や線状痕は確認できない。

続いて、草創期無文土器期の鹿児島県建昌城跡遺跡例がある(図2-2)。上石、下石ともに楕円礫である。この段階には凹痕と磨耗痕を伴う上石と、明瞭な磨耗痕をもつ下石が出現する。上石は凹類で表・裏面に凹痕と磨耗痕が併存している。凹痕は中央に1ヶ所あり浅い。磨耗痕は面中央を中心に長さ7.5cm、幅5.5cmの範囲に分布する。下石は表面中央に発達した磨耗痕が分布するⅠ凹a類である。磨耗痕は幅12cmで浅くレンズ状に凹む。これは、ちょうどぴったり上石が入る形と大きさであり、磨耗痕の性質も類似する。使用痕は磨耗による鉤物の平滑な部分は認められるものの、顕著な光沢や線状痕は認められない。また下石には上石の凹痕に対応する使用痕は見られない。

表2 草創～早期

上石分類 下石分類	Ⅰ 類							系列別			
	磨	磨+磨	磨+敲	凹	凹+磨	凹+敲	特殊磨石	磨耗系	凹系	側面磨耗	側面敲打
Ⅰ凸a					1				1	1	
Ⅰ凸b						1			1		1
Ⅰ凸			1								
Ⅰ平a	2	1						3		1	
Ⅰ平b	2						2	2			
Ⅰ平	2						1	3			1
Ⅰ凹a	1	3(石1)		1				3	1	2	
Ⅰ凹b							1				
Ⅰ凸敲					1	1			2	1	1

n=21

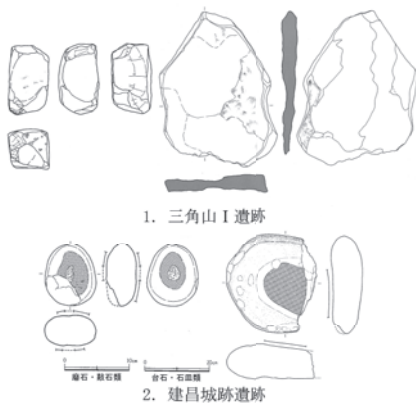


図2 草創期の共伴例

(図は表5 各遺跡文献より引用)

このように、草創期の共伴例は、温暖化による落葉広葉樹林が進出し始めたときとみられる九州南部に認められる。前半は大型の板石と不定形な礫の組み合わせで、使用痕は未発達であったが、後半には早期と遜色ない発達した使用痕をもつ上石と下石のセットが出現する。その特徴は表・裏面に凹痕と磨耗痕が併存する凹類と中央に磨耗痕が集中するI凹a類である。特に磨耗痕の形や大きさ、性質が上石、下石ともに一致していることから、それぞれ対応関係にあった可能性が高い。観察された磨耗痕は、実験結果を参考にすると、軟質物の脱殻・粉碎によって形成された可能性が高い。

早期になると、全国的に事例が増加する。磨類・磨+磨類にはI平a類・I凹a類、磨+磨類・凹+磨類にはI凸a類・I平a類・I凹a類、凹+磨類・凹+敲類にI凸類が伴うという傾向がうかがえる(表2)。また特殊磨石にI平b類とI凹b類が共伴する。以上の組み合わせをみると、表面あるいは側面に磨耗痕のある上石には、使用痕a類をもつ下石、凹痕のある上石には、I凸類が伴うという一定の傾向がみえる。

例えば、鹿児島県水迫遺跡では発達した磨耗面をもつ磨類と中央がレンズ状に凹むI凹a類がセットとなっている(図3-9)。下石の磨耗痕は長さ16cm、幅12.5cmで上石の長さが11cmなので、横向きにしてもすっぽり入る大きさである。このようなセット例は先に説明した建昌城跡遺跡例と同じであり、草創期後半に生まれた伝統が早期前半に至っても継続していたことがうかがえる。同様のセット例は、長野県机原三本松遺跡、静岡県三の原遺跡(図3-4)でもみられる。また、石鯰形磨石に代表される側面磨耗系の上石と下石とのセットもこの時期に出現する。静岡県中見代第Ⅲ遺跡例(図3-7)は、磨+磨類とI凹a類が伴出している。上石は発達した磨耗面をもち、側面にも平坦面が形成される。下石は使い込まれてレンズ状に凹む。側面の磨耗面は、表・裏面よりも粗さがある。同様の例は、千葉県踊ヶ作遺跡(図3-3)、同・臼久保遺跡(図3-6)、高知県刈谷我野遺跡(図3-10b)にみられ、磨類とI凹a類の組み合わせと同様、関東南部～西日本に比較的多い。北日本では、北海道東陽1遺跡(図3-1)や同・納内6丁目付近遺跡(図3-11)で磨類とI平b類の組み合わせが出現する。下石・上石ともに形態変化を起こすほどの磨耗面は見られず、先に触れた鹿児島県三角山I遺跡例など草創期前半の様相に類似する。この地域では早期中葉以降、特殊磨石の増加とともに側面磨耗系上石との組み合わせが増加する。

一方、敲打系の上石と下石の共伴例も出現する。東京都武蔵国分寺跡遺跡北方地区では、凹+敲類とI凸敲類との共伴例がある。上石の側面は敲打により凹んでいる。下石は表面中央に敲打痕が集中している。類似する例は高知県刈谷我野遺跡(図3-10a)、鹿児島県大中原遺跡(図3-8)にもある。刈谷我野遺跡では表・裏面に凹痕があり、同様の凹痕が下石にみられる。このように、敲

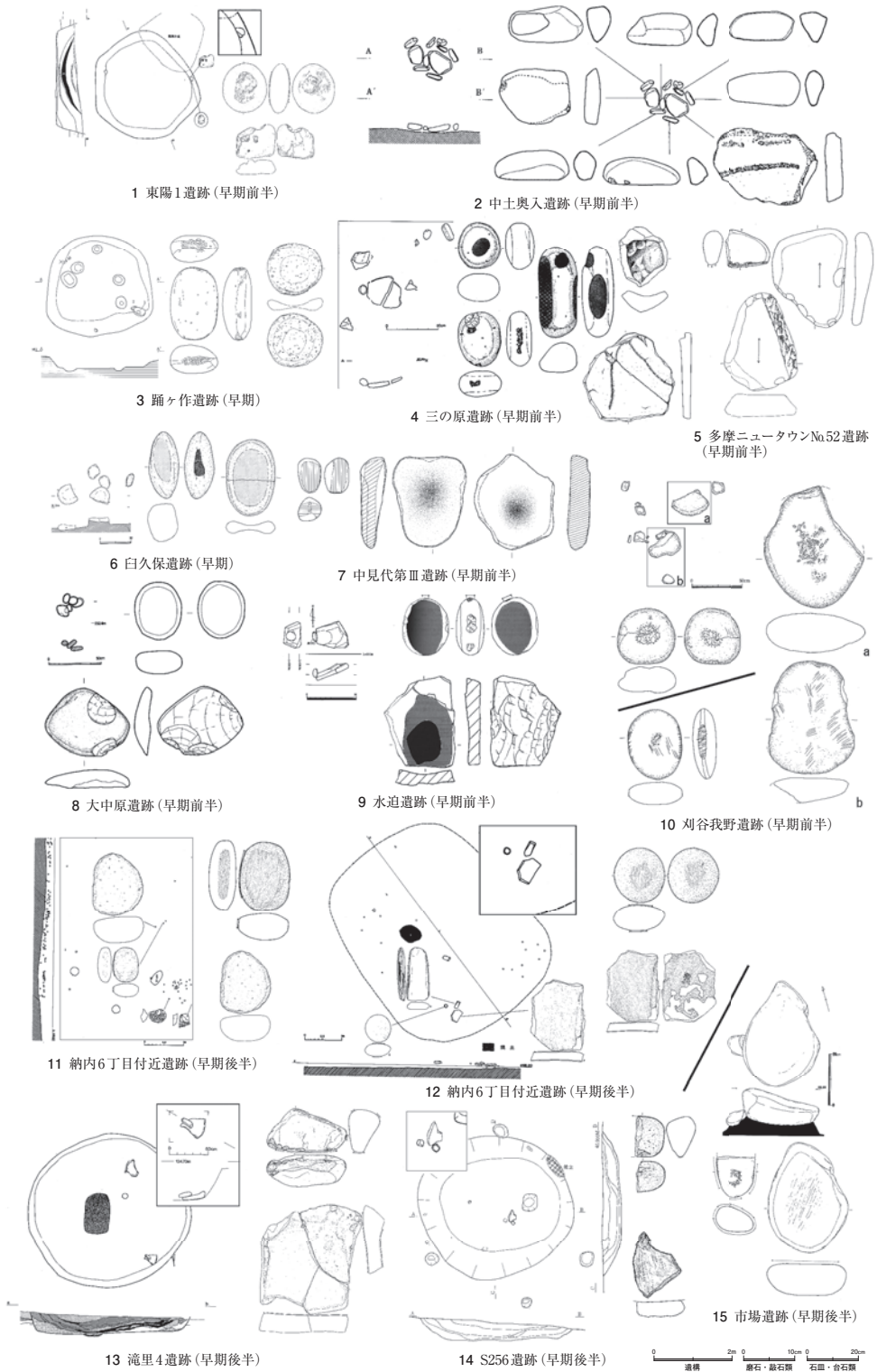


図3 早期の相伴例 (図は表5 各遺跡文献より引用)

打系の上石には、同じく敲打痕を伴う下石が近くで検出される。

特殊磨石に伴う下石は、I平b類がほとんどである。多くの事例は、比較的広い平坦面をもつ板状の石材であり顕著な使用痕が認められない。特殊磨石の分布は広く、時期的にも早期以降も継続するが、この組み合わせには、地域的・時期的な変化はない。新潟県中土奥入遺跡例（図3-2）のように2つの台石に対して6つの特殊磨石が伴っており、1つの台石に対して複数の特殊磨石がセットになっていたことが示唆される。

なお、磨石・敲石類の用途がうかがえる事例として、剥落系・磨類・磨+敲類の磨石・敲石類がまとまって出土する例がある。これらは、「埋納遺構」「磨石集石（集積）」として報告されているものである。集中出土例は草創期～早期前半の神奈川県や鹿児島・宮崎県などの太平洋沿岸、早期後半の北海道中南部～東北部にまとまる。草創期志風頭遺跡例（上東ほか1999）が人為的な礫石器の組み合わせとしては最も古い例に属す。多くは4点ほどの円礫・棒状礫を埋置するものである。各例をみると、志風頭遺跡例は棒状で側面上側に剥落痕がある。早期の磨+敲類の集石も下面からその側面にかけて敲打痕がある。台石は認められない点や周辺で剥片が多く出土している点をふまえると、草創期には石器製作用の敲石としての利用がうかがえる。

また磨類と磨+敲類の磨石集石がある鹿児島県上野原遺跡例（森田ほか2002）は、表・裏面ともに全体的に磨耗した磨石が出土している。しかしながら表・裏面の使用痕はあまり発達せず、平坦面も形成しない。磨+敲類も、側面の敲打痕が発達して面を形成しているものはほとんどない。関東西部の事例の多くも、磨類もしくは磨+敲類で構成される点で類似する。また、磨石類だけでなく、特殊磨石の集積例もある。以上の傾向と異なる上石のみの集中出土の特殊例として長野県美女遺跡SK243例（馬場ほか1998）がある。この事例は、磨+磨類と大形剥片がセットで出土している。大形剥片は、磨石の最大長よりも大きいことから、磨石の破片ではない。また剥片縁辺には剥落や磨耗痕があることから¹⁾、大形刃器として用いられた可能性が高い。側面に磨耗面がある上石の形状は、石罅形磨石と類似する。しかし、平坦面の形成が一定でない点や片側のみ面がある点、表・裏面の磨耗が余り発達していない点を考慮すると、石罅形磨石とは異なる。このように、磨石・敲石類の集積行為は、特定の上石に対して行われたのではないことが分かる。

そのほかに、早期後半北海道リヤムナイ遺跡例（図4-2）は敲石の周辺で未使用の石錘やその素材が検出されており、石錘の製作址と考えられる。その敲石は比較的小型の扁平礫の上・下端部の斜め横が敲打面となっているのが特徴である。

(2) 前～中期（表3）（図4～8）

この時期にはほぼ全国的に共伴例が見られる。それぞれの組み合わせを見ると（表3）、磨耗系や側面磨耗系の上石にI凸a類、I平a類、そしてII A～C類が伴う。表面あるいは側面に磨耗痕のある上石には使用痕a類をもつ下石が伴うという点は前段階と変わらないものの発達した凹みをもつI凹a類が少なくI凸a類が増加するという変化がみられる。そして新たにII A～C類の共伴

表3 前～中期

上石 分類	I類						II類		剥落	不明	系列別			
	磨	磨+磨	磨+敲	凹	凹+磨	特殊 磨石	扁平	北海道 式石冠			磨耗系	凹系	側面 磨耗	側面 敲打
I凸a	3	3		4	3			1		1	6	7	6	
I凸b			1			1	1		1		1			1
I凸	3			2						2	3	2		
I平a	3	1		3							4	3	1	
I平b	1				1	4	1	1		1	1	1	1	
I平					1	1	2	3				1	1	
I凹a			1					2			1			1
I凹b	2						4				2			
I凹				1								1		
I凸敲				1								1		
I平敲				1								1		
II A	6	1		5	2					1	7	7	3	
II B		1(石1)									1		1	
II C	4			1	1						4	2	1	

n=75

例が追加される。また凹系の上石との共伴例が急増する。凹系にはI凸a類、I平a類、II A類が伴い、磨耗系の傾向に類似する。この段階に新たに北海道式石冠と扁平石器の下石との共伴例も出現する。

磨耗系の上石と下石I凸a類、I平a類の共伴例は東北南部から九州南部を中心に分布する。群馬県糸井宮前遺跡や長野県殿村遺跡例(図4-8)、同・坂平遺跡例(図4-5～7)では、「鏡餅形扁平石」と称する平面が凸レンズ状に盛り上がる台石が増加する。これらはI凸a類、I平a類に属し、径30cm以上の大型礫で、硬質な石材が用いられているため、磨耗面の断面が形状変化するほど発達することが少ない。磨耗痕の範囲が分かる5例は、表面中央を中心に平均長16cm、平均幅12cmの円形あるいは短楕円形で、上石がちょうど入る大きさである。しかし、これら磨耗系の表・裏面の磨耗痕はほとんど発達しておらず、面形成までには至っていない。側面磨耗系も長野県坂平遺跡例や石川県庄が屋敷A遺跡例など表・裏面に磨耗痕が伴うものは少ない。したがって、早期段階まで、発達した磨耗痕をもつ磨類と、それに対応するI凹a類があったが、この組み合わせが急減したことが分かる。その一方で、側面磨耗系の上石と台石I凸a類、I平a類の組み合わせが増加する。

なお、従来、東京都新山遺跡例(図7-2)のような民具のトチの皮むき石に類似する棒状の敲石と台石の共伴例が目立ってきた。しかしながら、このような同様の事例は縄文時代を通じて極めて少ないことが分かる。したがって、トチの実利用を考えるならば、別の資料から皮むき石と考えられる資料を推定すべきだろう。

次にこの時期新たに加わった磨耗系の上石と石皿II A～C類、つまり狭義の磨石と石皿の組み合わせについて検討したい。石皿II A～C類と共伴する上石の表・裏面には、断面形状が変化するほ

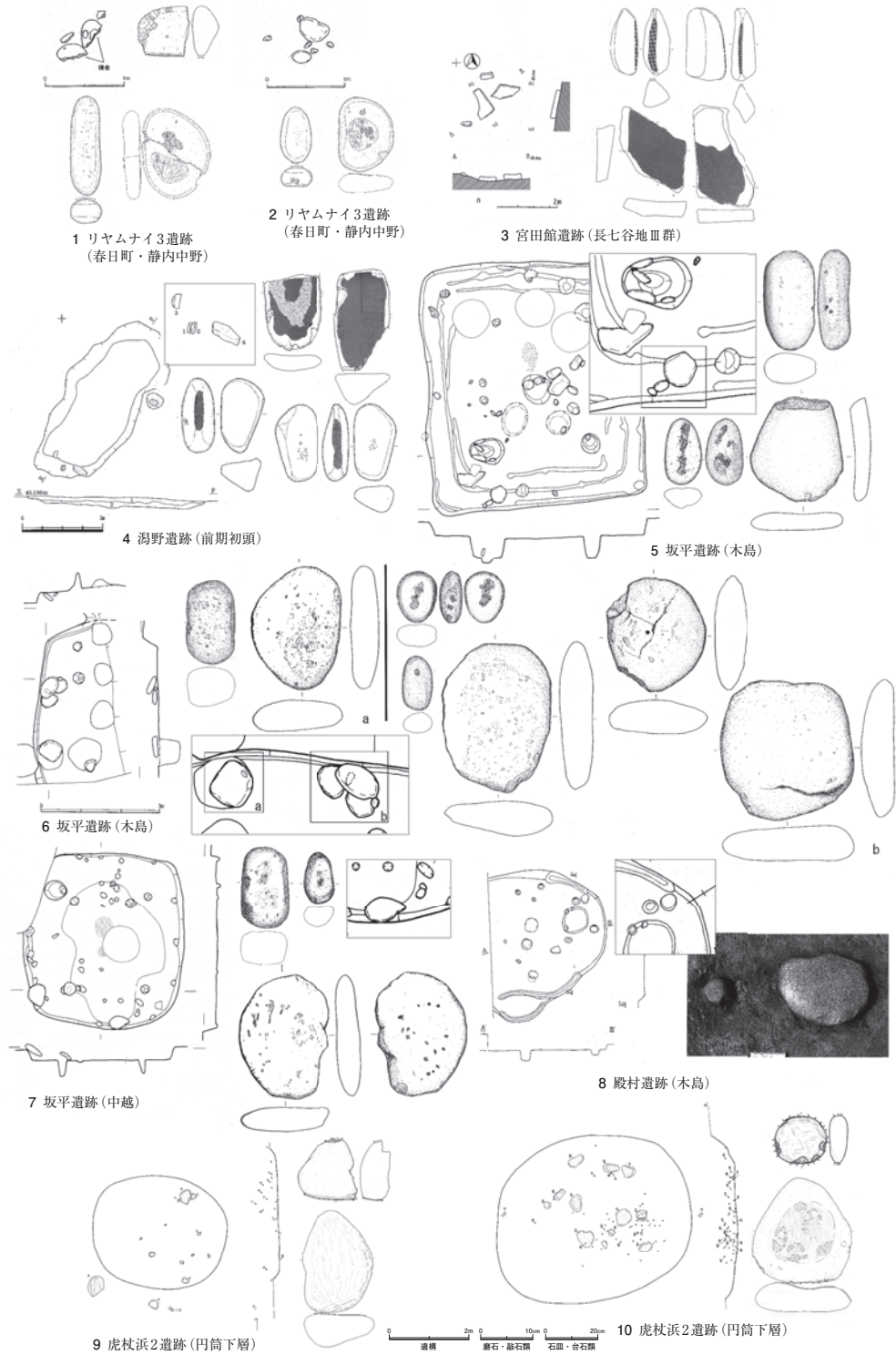


図4 前期の共伴例・1 (図は表5 各遺跡文献より引用)

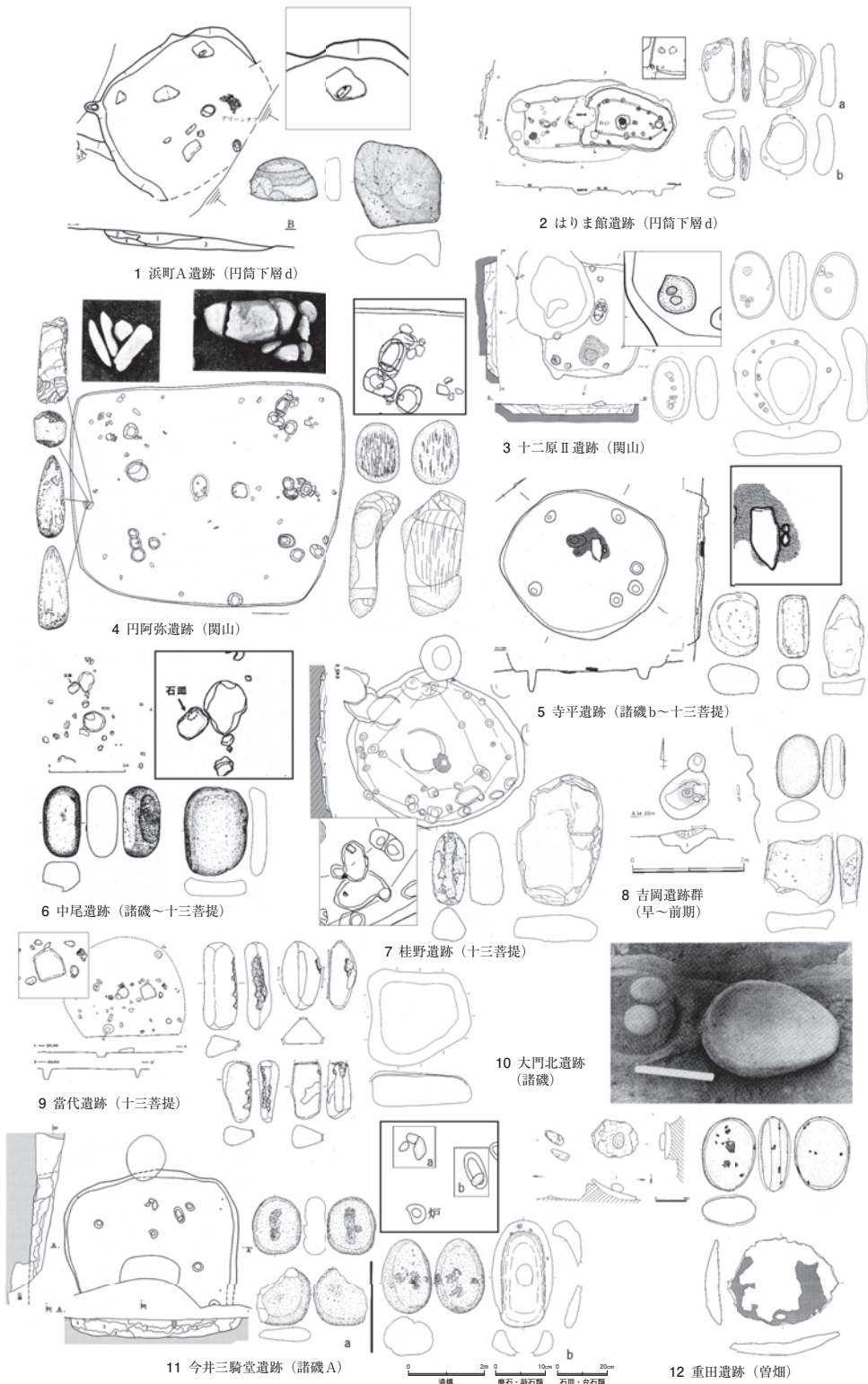


図5 前期の共伴例・2 (図は表5 各遺跡文献より引用)

どの発達した磨耗痕が観察できる。例えば、神奈川県尾崎遺跡（図7-3）や山梨県大月遺跡（図8-1）、岐阜県塚原遺跡例では、磨耗面と礫面との境界に稜線を観察することができる。これらの磨耗面は平坦面ではなく凸レンズ状に盛り上がり、同じくレンズ状に凹む石皿の凹部形態と一致する。この点は、先ほどのⅠ類との組み合わせでみられた磨耗系とは異なる現象である。それぞれの凹部の使用痕の広がりを見ると、石皿ⅡA類は、長さ24～48cm、平均長30cm、幅10～23cm、平均幅17.1cm、石皿ⅡC類は、長さ13～31cm、平均長25cm、幅6.1～20cm、平均幅13cmである。これに伴う磨耗系の上石は長さ5.4～11cm、平均長9.2cm、幅4.6～9cm、平均幅7.6cmで、上石を横向きに置いてもすっぽり入る大きさである。

例えば、中部高地の石皿ⅡC類は、その使用痕幅が13cmほどであり、長野県山の神遺跡例や同・牛の川遺跡例（図7-8）では、凹部より一回り小さい円礫が上石として用いられている。また、石皿ⅡA類と上石が共伴する例のなかには、凹系の上石との共伴例が数多い。一見すると、両者の使用痕が異なるため、抽出時のミスのようにもみられるが、実際にこれら凹系の上石を観察すると、群馬県十二原遺跡例（図5-3）や同・今井三騎堂遺跡（図5-11b）、神奈川県早川天神森遺跡（図7-4）、長野県中尾遺跡例（図5-6）など、凹痕がみられる同じ面に発達した磨耗痕がみられる。このことから、実際には凹痕形成時に石皿が使われていたのではなく、同一面の磨耗痕形成時に石皿が用いられていたとみられる。実際、石皿に伴う凹系の大きさは長さ11～15cm、平均長13.6cm、幅6～9cm、平均幅7.6cmで、横向きにしてもすっぽり入る大きさである。

さらに、石皿のなかには刻文付石皿があった。刻文付石皿は全国で200点余が知られるが、今回、群馬県菅野遺跡例と岐阜県上岩野遺跡（図7-10）の2例があった。菅野遺跡例は石罅形磨石、上岩野遺跡は磨類が伴うが、いずれも表面に磨耗面があり、刻文付石皿が実際に使用されていたことを示唆する。

このように磨耗系の上石が石皿ⅡA～C類と共伴する例は、凹系の多くが表・裏面に磨耗系上石と同じ磨耗痕を伴うことをふまえると、他の分類に比べて突出して多いことが分かる。一方、側面磨耗系との対応例は少ないことが分かる。

石皿Ⅱ類に対応する凹系以外もⅠ凸a類やⅠ平a類と共伴しており、磨耗系と同じ様相を示す。これらの凹系をみると、神奈川県当麻遺跡例（図6-10）、長野県日向坂遺跡例、（図7-9）鹿児島県重田遺跡例（図5-12）など、表・裏面には凹痕と同じ面に発達した磨耗面が認められる。また下石も集中的に磨耗している範囲がある。これらは草創期以来継続している発達した磨耗痕をもつ上石と下石の組み合わせに類似する。一方、北海道リヤムナイ3遺跡例（図4-2）や福島県馬場前遺跡例（図6-7）、群馬県今井三騎堂遺跡例（図5-11a）のように凹系の敲石に対応するように下石に凹痕や敲打痕が認められる例もある。

このほか、下石と上石の数に注目すると、関山式の埼玉県円阿弥遺跡例（図5-4）や群馬県十二原Ⅱ遺跡例（図5-3）など磨耗によって凹んでいる下石や、長野県大門北遺跡例（図5-10）や同・北丘B遺跡例（図7-6）のⅡA類など、下石1点に対し、上石2点が共伴する例がある。

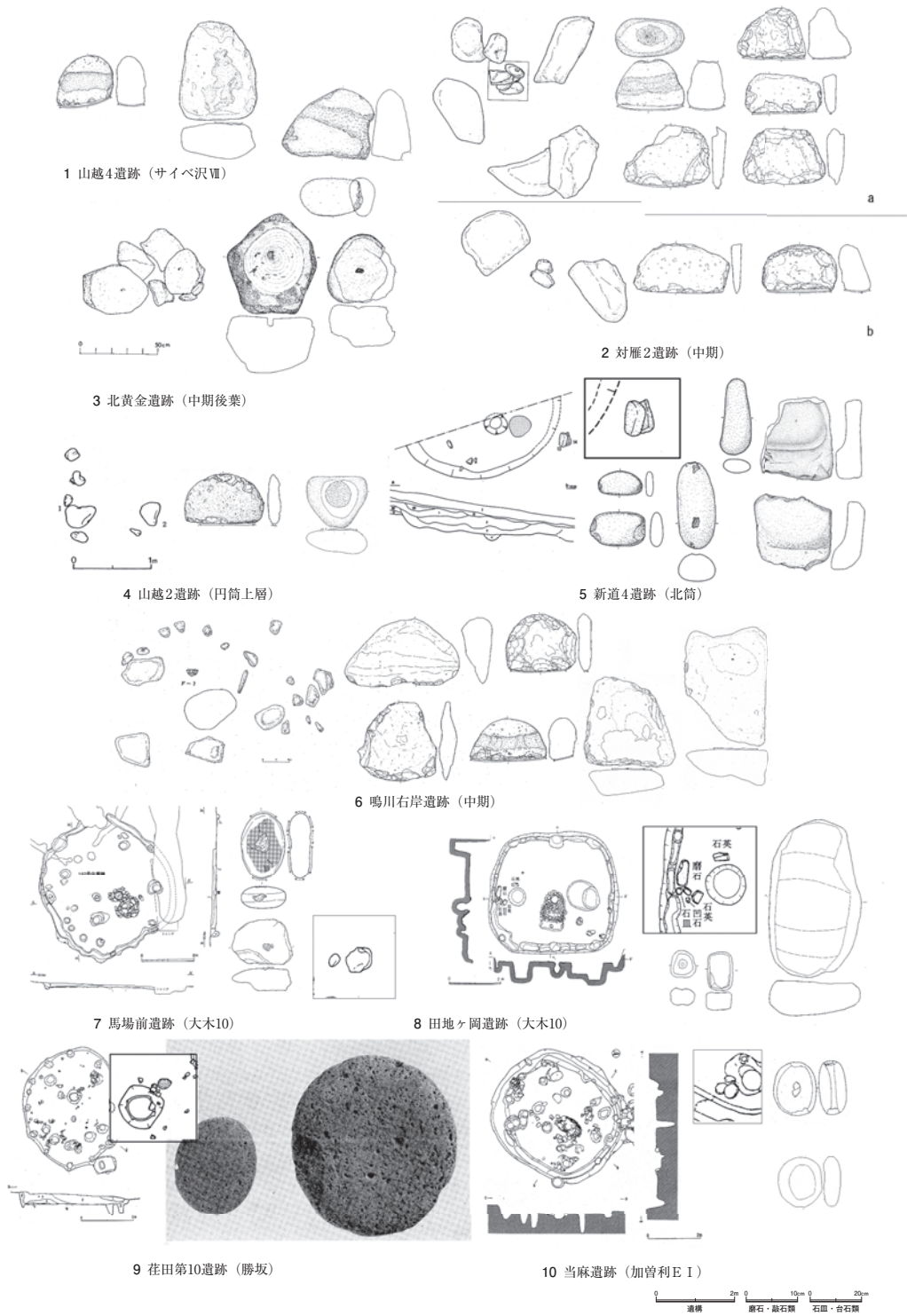


図6 中期の共伴例・1 (図は表5 各遺跡文献より引用)

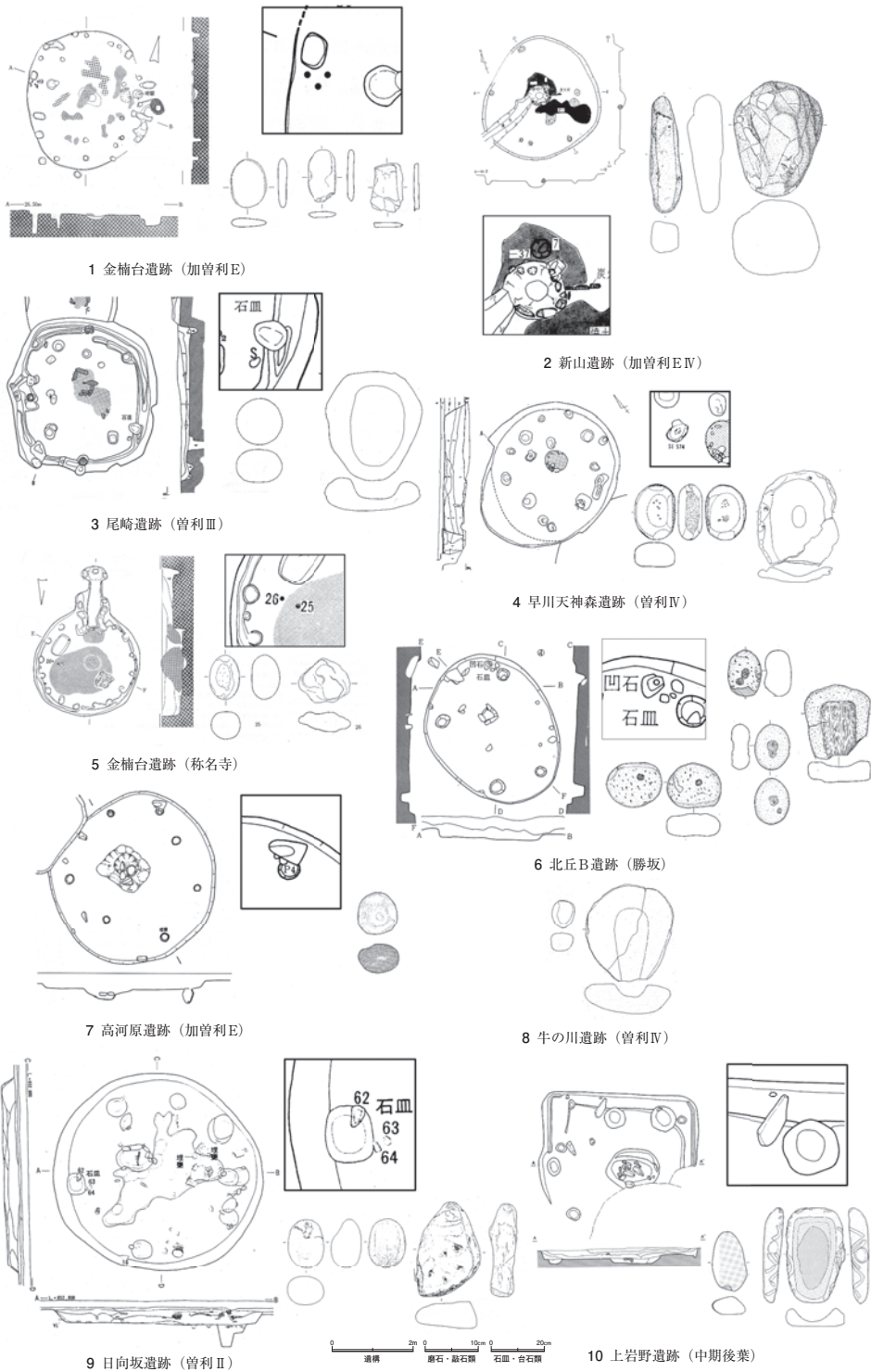


図7 中期の共伴例・2 (図は表5 各遺跡文献より引用)

上石は2点とも使用痕は同じであることから、同一の作業に用いられたとみられる。その一方、福島県田地ヶ岡遺跡例(図6-8)や長野県坂平遺跡例(図4-5・6b)は台石I凸a類1点に対して、それぞれの使用痕の異なる2点の上石が共伴している。2点の上石のひとつは磨+磨類である。もうひとつは凹類で磨+磨類よりも小型である。いずれも表・裏面の磨耗痕は発達していない。したがって、この二種の上石は使用痕からみても全く別であり、1つの下石に対して、上石を使い分けた少なくとも2種類の作業があったことを予測させる。また刈谷我野遺跡例(図3-10)や坂平遺跡例(図4-6)では、側面磨耗系の磨石と下石のセット、凹系の敲石と下石のセットが一住居址で検出されている。今井三騎堂遺跡例(図5-11)のように、凹系の敲石と下石のセットと、磨耗系の上石と石皿のセットの二つのセットが一住居址で検出される例がある。こうした例は、同じ住居内で機能・用途の異なる2つのセットの存在を示すものであり、注目される。

次に、この時期に展開する北海道式石冠や扁平石器の下石との共伴例を検討したい。北海道式石冠と下石との共伴例は6例あり、全て前期後葉～中期の石狩低地帯から渡島半島の地域に分布する。北海道式石冠と共伴する下石は、I凸a類、I凹a類など磨耗痕が一定の範囲に集中する。また北海道対雁2遺跡例(図6-2)や同・鳴川右岸遺跡例(図6-6)のように北海道式石冠と扁平石器がセットになって検出される例もあり、この場合、下石はI平b類が多くなる。下石の使用痕は礫中央を中心に円形～短楕円形の磨耗痕が広がる。礫面と磨耗面との境界の稜線は明瞭で、なかには断面レンズ状に凹む例もある。また浜町A遺跡例(図5-1)のように複数の磨耗面が重なり合っている例もある。磨耗面の広さは長さ16～34cm、平均長23.6cm、幅10.8～24cm、平均幅16.7cmである。共伴する北海道式石冠の下面の広さは長さ9～15.5cm、平均長12.9cm、幅5～7.5cm、平均幅6.1cmであり、石冠を下石の磨耗面に対し、横向きに置くと、ちょうど収まる大きさである。北海道北黄金遺跡例(図6-3)では台石に凹痕がある。この凹痕の内部は磨耗していないことから、磨耗痕を伴う作業後に、形成されたと考えられる。また住居址内だけでなく、集積遺構として複数点がまとまって検出される例が多い。特に北海道式石冠と扁平石器との共伴例は、両石器が同じ空間・時間内で使用されていたことを示し、同じ対象物を加工していたか、加工工程ごとに使い分けをしていたかが考えられる。

扁平石器と下石との共伴例は8例あり、前期後葉～中期の北海道石狩低地帯から東北北部に分布する。扁平石器と共伴する下石は台石I凸b類、I平b類、I凹b類で、磨耗痕が均一的な広がりを見せる。北海道式石冠だけでなく、特殊磨石と共伴する例がある。北海道新道4遺跡例(図6-5)や同・亀田中野遺跡例、秋田県はりま館遺跡例(図5-2)などは径30cm以上の大型の板石が用いられており、表面全体が帯状、船底状に凹む。下石の磨耗面は長さ10～37cm、平均長25cm、幅10～31cm、平均幅18cmの長楕円形である。扁平石器の下面は長さ5.5～15cm、平均長12.2cm、幅0.8～1.8cm、平均幅1.1cmで、上石を縦向きにしても横向きにしても入る大きさである。はりま館遺跡例の場合、台石には長軸に対してやや斜め方向に船底状に凹む磨耗痕がある。したがって真上から見たとき、扁平石器は長軸に対しやや斜め方向に保持されていたと推測される。

前期以降も特殊磨石と下石との共伴例が5例ある。青森県宮田館遺跡例（図4-3）、同・湯野遺跡例（図4-4）ともに前期初頭で、破損した台石2点と特殊磨石2点が共伴している。甲府盆地の例は桂野遺跡例（図5-7）、當代遺跡例（図5-9）でいずれも十三菩提式期である。當代遺跡例は台石1点に対し4点の特殊磨石がある。使用痕は早期のものと変わらない。このように特殊磨石とその下石は、北海道から中部高地の広い範囲で早期からの長期にわたり継続的に使用されているうえ、使用痕の形態もほとんど変わらない。

(3) 後～晩期（表4）（図8・9）

後期中葉～晩期前葉の事例が多い。上石と下石の共伴例をみると、中期にみられた磨耗系や側面磨耗系の上石にI凸a類、I平a類、そしてII類が伴うという基本的な構成は変わらないが、これら上石に下石I平b類とI凹a類の共伴例が増加するという変化が加わる。

磨耗系の上石と下石I凸a類、I平a類の共伴例をみると、北海道キウス7遺跡例（図8-5）では中期同様、上石は表・裏面の磨耗痕が弱く側面を主に使っていたことがうかがえる一方、福島県松ヶ平D遺跡例（図9-6）や三重県覚正垣内遺跡例（図9-13）、滋賀県穴太遺跡例（図8-3）など西日本を中心に表・裏面の発達した磨耗痕をもつ上石と、磨耗によって表面中央が凹んだ下石が認められる。下石の磨耗痕の外形は短楕円形でレンズ状に凹む。長さ12～23cm、平均長21.6cm、幅12～20cm、平均幅15.4cmで、草創期から見出せる磨耗系の上石と下石I凸a類、I平a類の組み合わせが継続していることが分かる。これがさらに磨耗してレンズ状に形状変化したものがI凹a類で、北海道から九州の広い範囲に分布する。磨耗系の上石と台石I平b類の共伴例は、東北地方に多い。青森県水木沢遺跡例（図9-1）や同・米山（2）遺跡例（図8-9）はいずれも硬質な板石が下石として用いられている。使用痕は下石・上石ともに磨耗痕は弱く形状変化していないという共通性がある。したがって、これらのI平b類はI平a類へ発達する前段階の形態を示す可能性がある。凹系と下石との共伴例をみると、例えば岩手県上斗内Ⅲ遺跡例（図9-3）のように、

表4 後～晩期

上石分類 下石分類	I類					不明	系列別			
	磨	磨+磨	磨+敲	凹	特殊磨石		磨耗系	凹系	側面磨耗	側面敲打
I凸a	1						1			
I凸b	1			1			1	1		
I平a	2	1		2			3	2	1	
I平b	3		1				4			1
I平	1				1		1			
I凹a	5	1	1	1			7	1	1	1
I凹b				1				1		
I凹		1(石1)				1	1		1	
II A	1	1(石1)		1			2	1	1	
II B	1						1			

n=27

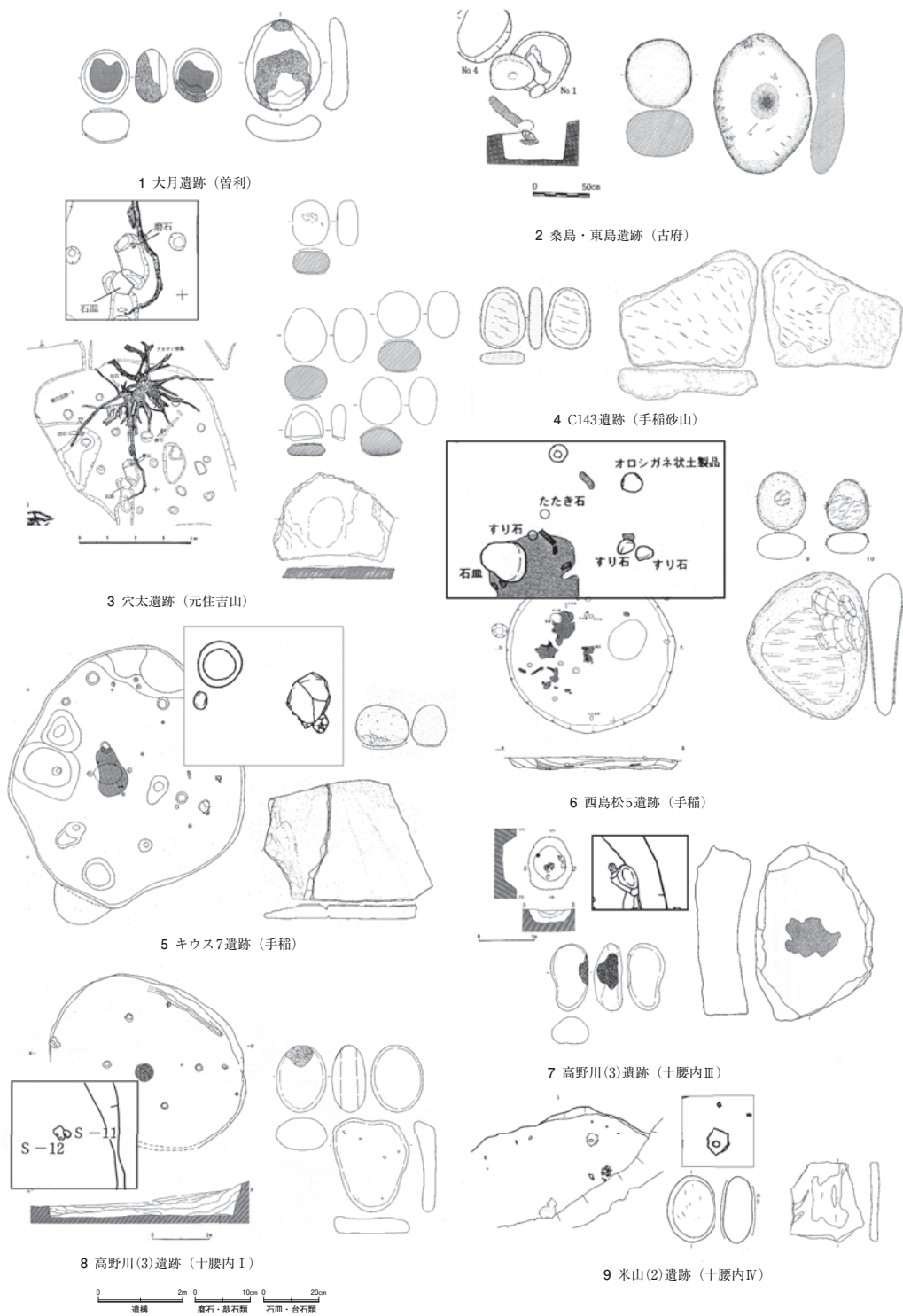


図8 中・後期の共伴例 (図は表5 各遺跡文献より引用)

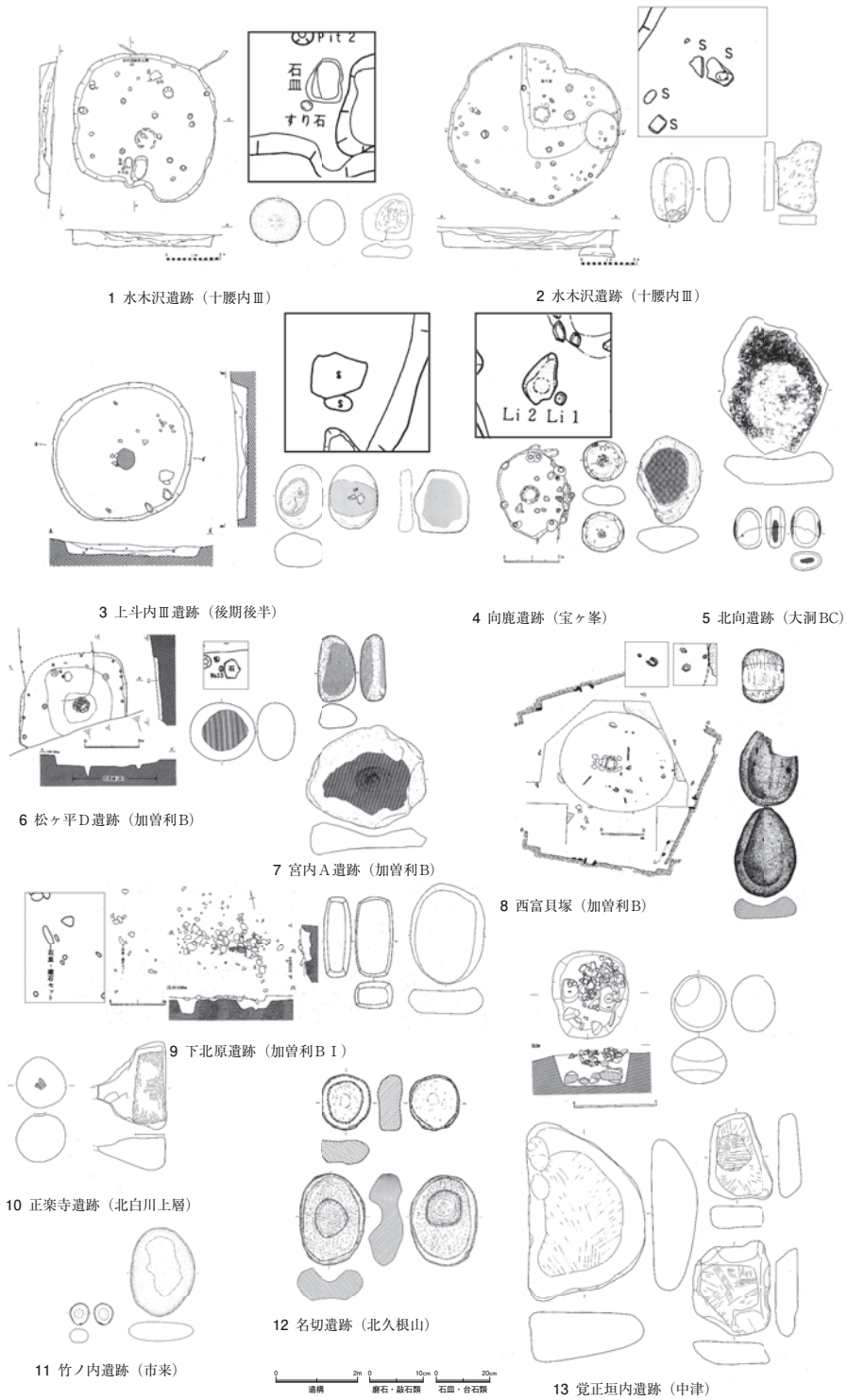


図9 後～晩期の共伴例 (図は表5 各遺跡文献より引用)

凹痕と同じ面に磨耗面も観察できる。また下石にも発達した磨耗面が認められる。したがって、中期と同様、凹痕の形成時に下石が使われていたのではなく、磨耗痕の形成時に下石が使われていた可能性が高い。以上より、磨耗系の上石と下石Ⅰ平b類・Ⅰ凹a類の増加現象は、道具の機能的な変化によるものではなく、使用時間の変化によるものと考えられる。その背景として、前～中期まで隆盛していた石皿Ⅱ類の減少があると考えられ、本来石皿Ⅱ類が担っていた用途が再び台石Ⅰ類に戻ったのではないかと考えられる。

側面磨耗系や石罅形磨石はⅠ平a類やⅠ凹a類、石皿ⅡA類との共伴例があり、この傾向は中期と変わらない。神奈川県西富貝塚例（図9-8）や同・下北原遺跡例（図9-9）など、発達した磨耗面を表・裏面にもち、側面にはそれよりも粗い磨耗面をもつ。

4. 考察

(1) 各分類の組み合わせ（図10）

各時期の上石と下石の共伴例を検討した結果、その組み合わせにある程度の規則性を見出せた。その規則性は、上條（2007b）の形態組成の変化で予測したセットとほぼ一致する。したがって、上石と下石の組み合わせは決して任意ではなく、それぞれ選択されていたことが、出土状況からでもうかがえる。出土状況から見出された上石と下石の組み合わせのモデルを図10に示した。下石のほうが、上石の変異幅に比べ、その対応関係が比較的明瞭であった。したがって、下石の形態に着目しながら、上石との組み合わせをまとめてみたい。

まず台石（Ⅰ類）で見出されたのは、上石の系列レベルでの規則性である。それは、磨耗系の上

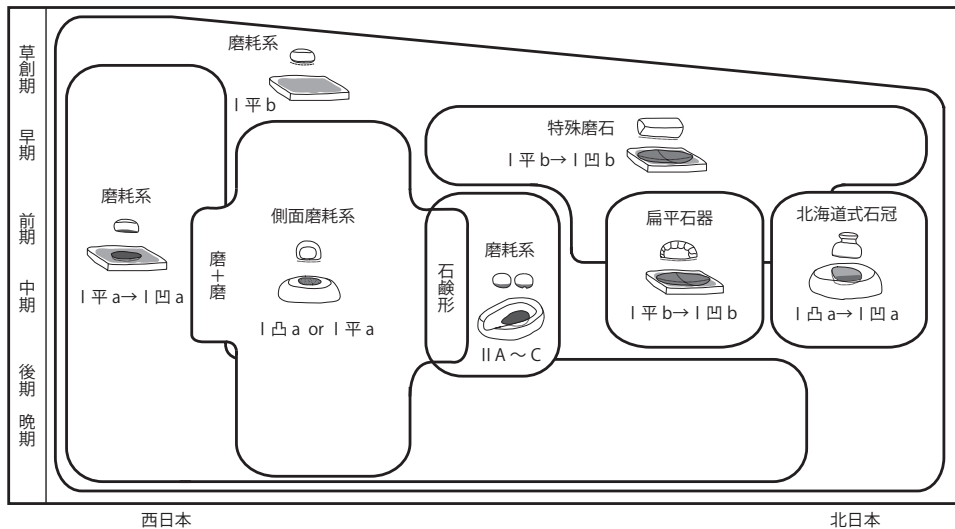


図10 上石・下石の組み合わせの変遷

石にはI平a・b類、I凹a類、側面磨耗系の上石にはI凸a類とI平a類が伴う点である。

磨耗系の上石とI平a・b類、I凹a類の組み合わせは、観察の結果、上石の磨耗痕が発達するほど、下石の磨耗痕も発達し、最終的に凹むことがわかった。したがってこれら3タイプの下石は、作業時間の累積による形態変化の過程を示しており、I平b類→I平a類→I凹a類の順で磨耗痕が発達していくものと考えられる。磨耗痕の不明瞭な磨耗系の上石と台石I平b類は草創期前半から検出されるが、草創期後半になると発達した磨耗痕が観察されるようになる。上石には断面凸レンズ状の磨耗面が形成され、下石の中央は磨耗によって凹む。下石の磨耗痕は長さ16cm、幅12cmほどの長楕円形で、上石を横向きしてぎりぎり入る大きさになる。この点が磨耗系の上石と組み合わせる下石の大きな特徴である。

一方、側面磨耗系の上石とI凸a類、I平a類の組み合わせは、上石側面が平坦面を形成するほど発達するのに対し、下石は磨耗面が認められるものの、形状変化するほどまでには発達しないことが分かった。特に「鏡餅状」と称される断面が凸レンズ状に盛り上がる硬質な台石が選択される場合もあった。また、早期に磨+磨類が増加する傾向にあるが、実際の共伴例の多くは、表・裏面の磨耗が未発達であり、前期以降になって表・裏面の磨耗面が発達するものが増加し、その代表例として「石鹼形磨石」が出現することも分かった。

このように、これまで磨石と石皿として、単純化されていた上石と下石には、未整形のものだけを扱っても、使用痕の違いによって大きく三つの組み合わせが存在することが分かった。

次に石皿(Ⅱ類)で見出された上石について述べる。石皿には磨耗系の上石だけでなく凹系の上石や、同時期に増加する石鹼形磨石とセットになり、その相関関係は複雑にも見えた。しかし、実際には、石鹼形磨石と石皿との共伴例は少なく、磨耗痕をもつ上石との共伴例が多い点、凹痕をもつ上石であっても、同一面に磨耗痕もあり、これが石皿と対応する点、の2つが明らかとなった。

石皿Ⅱ類には凹部のほかに、側縁や裏面に凹痕が観察される。上石にも表面に凹痕と磨耗痕双方が併存している個体が多く、それぞれの痕跡の対応関係が分かった。同様に、石鹼形も使用痕ごとに対応する下石の作業部位の違いや下石そのものの違いが推定された。このことから、上石・下石ともに複数の機能があり、それは各部位の使用痕に対応すると考えられる。一見異なるタイプの共伴例でも使用痕からみるとそれぞれが原則的には一致するのである。下石の使用痕分類レベルでの通時的な相関性については、石皿Ⅱ類と共伴する上石は共通しており、Ⅱ類の外形の違いによる上石の変化はない。したがって、石皿Ⅱ類の外形上の違いは、脱殻・粉碎機能と関係ない要因で生じていると考えられる。

特殊磨石や扁平石器、北海道式石冠といった特徴的な器種は、それぞれに対応する特徴的な使用痕をもつ下石の存在が示唆された。また、それぞれの下石の形態には時期差がなかった。よって、これら三つの器種は時期的・地域的な分布の変化はみいだせるものの、機能的には共通していたことをうかがわせる。

上石の凹痕や敲打痕に対応する下石は、下石に観察される敲打痕の有無から確認できた。しかし、

敲打系に対応する台石は少なく、凹系の多くは同一面に磨耗痕を伴うことから、凹痕の形成時に対応する下石を見出すことは困難であった。

(2) 加工対象物と加工動作

最後に、これらの加工対象物と加工の際の上石の操作について考えてみたい。まず、共伴例の見出された遺跡のうち、炭化種子など加工対象物と考えられる資料が検出されている例が11例あった。また間接的ではあるものの、住居の構築材の樹種が判明している例が3例あった。まずⅠ平a類と磨耗系の上石が主体的な遺跡をみると、例えば、静岡県三の原遺跡ではシイ属の炭化材が見ついている。特殊磨石とのセットが見いだされた遺跡では、オニグルミやコナラ属の種子が検出されている。また、石皿Ⅱ類と磨耗系のセットが見いだされた遺跡では、オニグルミのほか、クリが目立つ。注目すべき例としては、長野県机原遺跡ではカリントウ状炭化物と称される塊が検出されている。どんなものが材料になっているか分かってはいないものの、粉碎加工が実際に行われていたことを示す資料として重要である。

食料以外の対象物としては、北海道虎杖浜2遺跡例(図4-10)のように下石と上石双方に赤色顔料が付着している例がある。この例の上石は磨+敲類、下石はⅠ凹a類に該当する。赤色顔料は上石の表・裏面、下石の凹部の磨耗面に付着している。特徴的なのは側面に敲打痕がみられる点である。この点は他には少ない。赤色顔料の原料はベンガラや朱といった鉱物である。いずれの原料も塊で産出され、これを碎き、精製することで顔料として利用する。遺跡からはベンガラの鉱物塊が検出されることもある。したがって、虎杖浜2遺跡例をもとに赤色顔料の製作を考えると、まず上石の側面を敲打面として、ハンマーとして粗割りしたのち、粗割りされた小塊を下石の上に置き、上石の表・裏面を用いて製粉したのではないかと考えられる。

さて、磨耗面が観察された資料については、その範囲も検討した。その結果、磨耗系と対応すると推定されたⅠ凹a類を代表とする発達した磨耗痕がある下石のその範囲は、長さ20cm程度で、幅はちょうど上石を横向きにするとすっぽり入る大きさであった。また下石の磨耗面の横断面は凸レンズ形に凹み、上石の磨耗面もそれに対応する形状であった。特に上石の磨耗面は、長軸に対して斜め方向に発達していることが分かった。下石のうえでの上石の動きを推定すると、少なくとも水平に円運動したとは考えられず、前後方向に向かって力をかけたと推定される。また均等に力をかけてまっすぐに上石を擦ったとすると、大陸のサドルカーンのように平坦な面が出来るはずであるが、このような傾向はうかがえない。したがって、上から見て斜め方向に片手で握る保持が推定される。この下石の磨耗面の傾向は、石皿Ⅱ類も同様であり、系譜的な関連性がうかがえる。

特殊磨石と扁平石器の下石の形状は類似しており、いずれも面全体がレンズ形に緩やかに凹む。いずれの上石も使用痕は細長く平坦な磨耗面であった。したがって、面全体を使用するような動作が推定される。

北海道式石冠に伴う下石の磨耗面は、平面楕円形で石冠の下面を横向きにするとちょうど収まる

広さだった。上石の動きを推定すると、これも少なくとも水平に円運動したとは考えにくい。

このように、上石と下石の一括出土例を検討した結果、それぞれの対応関係に一定の規則性があることが分かったほか、使用痕から作業動作をある程度推定できた。

謝辞 本稿を作成するにあたり、下記機関の協力を賜った。記して感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費「先史時代東日本における食料加工技術の研究」（研究課題番号：24720349）の助成を受けたものである。

始良市教育委員会、青森県埋蔵文化財調査センター、伊勢崎市赤堀歴史民俗資料館、指宿市教育委員会、各務原市教育委員会、鹿児島県立埋蔵文化財センター、岐阜県文化財保護センター、伊達市教育委員会、富士見町教育委員会、松本市教育委員会（五十音順・敬称略）

註

- 1) 筆者の資料観察の結果による。

参考文献

- 上條信彦 2007a 「縄文時代石皿・台石の研究」『古文化談叢』第56集. 九州古文化研究会. pp.25-54
- 上條信彦 2007b 「石皿と磨石」『縄文時代の考古学』第5巻. 同成社. pp.88-101
- 上東克彦・福永裕暁 1999 『志風頭遺跡・奥名野遺跡』（加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書 16）加世田市教育委員会
- 小林康男 1978 「縄文時代の磨石」『中部高地の考古学』長野県考古学会. pp.136-158
- 田村 博 1998 「縄文時代石皿の研究史と展望—石皿・磨石の組み合わせと作業動作を中心に—」『多摩考古』第28号. pp.13-18
- 田村 博 2001 「石皿・磨石の組み合わせについて」『利根川』第22号. 利根川同人. pp.43-47
- 馬場保之・下平博行 1998 『美女遺跡』飯田市教育委員会
- 橋口尚武 1982 「枳餅と敲石・台石の事例研究」『賀川光夫先生還暦記念論集』賀川光夫先生還暦記念会. pp.359-371
- 浜田晋介 1992 「弥生時代の石皿と磨石—南関東地域の事例から—」『考古論叢神奈川』第1集. 神奈川県考古学会. pp.56-106
- 森田郁朗・今村敏照・他 2002 『上野原遺跡：第2～7地点』（鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 41, 52）鹿児島県立埋蔵文化財センター

表5 上石・下石の共伴例

都道府県	番号	図番号	市町村	遺跡名	遺構名	主体時期	主体土器型式	石皿・石皿類 分類	磨石・破石類 分類	下石長	下石幅	下石使用 枚数	下石使用 枚数	上石長	上石幅	上石使用 枚数	上石使用 枚数	備考	文献・所蔵	
北海道	1	図3-1	網路郡網路町	東陽1遺跡	ビットP-2	早期前葉	テネル・晩	台石1平	磨	29.5	24.5	—	—	9	7.4			高橋和樹・他2006「東陽1遺跡」北海道埋蔵文化財センター調査報告書230(北海道埋蔵文化財センター)		
	2	図3-11	深川市	納内6丁目付近遺跡	住居址 H-1周辺	早期後半	中茶路	台石1平A	磨+磨	24.5	19.5	22	16	13.5	10.5	9.5	2.2		西田茂・和泉田毅・他1989「納内6丁目付近遺跡」北海道埋蔵文化財センター調査報告書55(北海道埋蔵文化財センター)	
	3	図3-12			住居址 H-17	早期後半	中茶路	台石1平b	磨	27.3	19	25	16.8	10	10	10	10			
	4	図3-13	芦別市	滝里4遺跡	住居址 H-13	早期中葉	糸痕文	台石1平	特殊磨石	30	23	30	23	15.5	6	13	2		遠藤香澄・他1996「滝里4遺跡(2)」北海道埋蔵文化財センター調査報告書98(北海道埋蔵文化財センター)	
	5	5	札幌市中央区	C143遺跡	3号土坑	後期前葉	手稲砂山	台石1平	特殊磨石	39	34			20	6	15	1		藤井誠二2002「C143遺跡」(札幌市文化財調査報告書70)	
	6	図8-4			包含層	後期前葉	手稲砂山	台石1平A	磨	48.5	41	46.3	35	11	8	9.8	6.2		札幌市教育委員会	
	7	図3-14	札幌市白石区	S 256遺跡	2号竪穴住居址	早期後半		台石1凹b	特殊磨石	25	17	25	17	—	6	—	1		上野秀一1975「S256遺跡・S257遺跡・S253遺跡」(札幌市文化財調査報告書11)札幌市教育委員会	
	8	図8-6	恵庭市	西島松5遺跡	住居址 H47	後期中葉	手稲	台石1凹A	磨	27	21.4	17.4	15	10.4	8.6	10.4	8.6		佐藤和雄2006「西島松5遺跡(4)」(北海道埋蔵文化財センター調査報告書224)北海道埋蔵文化財センター	
	9	図6-2a	江別市	対雁2遺跡	一括石器1	中期		I 平	石冠(2点) 扁平石器(3点)										下石は図版のみ	
	10	図6-2b			一括石器7	中期		I 平	扁平石器・ 特殊磨石											下石は図版のみ
	11	図8-5	千歳市	キウス7遺跡	住居址 H-7	後期中葉	手稲	台石1平A	磨+磨	30	22	23	20	10	6	8	4		西田茂・他1996「キウス7遺跡(3)」(北海道埋蔵文化財センター調査報告書105)北海道埋蔵文化財センター	
	12	図4-1	岩内郡共和町	リヤムナイ3遺跡	集石 S-15	前期前半	春日町・ 静内中野	台石1凸b	特殊磨石・ 磨+磨	35	26.5			19.5	6.7				遠藤香澄・他2006「上リヤムナイ遺跡・リヤムナイ3遺跡(2)」(北海道埋蔵文化財センター調査報告書230)北海道埋蔵文化財センター	
	13	図4-2			集石 S-17	前期前半	春日町・ 静内中野	台石1凸b	剥落	28.5	21	13	11	11	6	—	—			遠藤香澄・他2006「上リヤムナイ遺跡・リヤムナイ3遺跡(2)」(北海道埋蔵文化財センター調査報告書232)北海道埋蔵文化財センター
	14	図4-9	白老郡白老町	虎杖浜2遺跡	住居址 H-7	前期後葉	円筒下層	台石1凸A	石冠	38.8	26.4	34.5	20	12	12	12	5.9		タデ科・マタケレ 属・ブドウ科(種子)	
	15	図4-10			住居址 H-8	前期後葉	円筒下層	台石1凹A	磨+磨	41.6	38.8	26.5	21	10.3	9.4	10.3	9.4			高橋和樹2001「虎杖浜2遺跡」(北海道埋蔵文化財センター調査報告書158)北海道埋蔵文化財センター
	16	図6-3	伊達市	北黄金貝塚	集石遺構	中期後葉		台石1凹A (2点)	石冠・磨+磨	39 26	30 27	26 18	24 18	17	8	15.5	7.5		長崎卓也・大高直行1997「北黄金貝塚発掘調査報告書」伊達市教育委員会	
	17	図6-4	山越郡八雲町	山越2遺跡	集石 S-1	中期中葉	円筒上層	台石1凸b	扁平	23.4	19.6	10	10	15	2.3	10.6	0.8		笠原厚・佐藤剛・他2001「山越2遺跡」(北海道埋蔵文化財センター調査報告書163)北海道埋蔵文化財センター	
	18	図6-1			山越4遺跡	包含層	中期中葉	サイベ沢Ⅳ	台石1平	石冠	18.5	15	18	12	10.5	5.5	9.2	5		藤原秀樹・立田理・他2002「山越3遺跡」(北海道埋蔵文化財センター調査報告書166)北海道埋蔵文化財センター
	19		亀田郡七飯町	鳴川右岸遺跡	集石 S-5	早期～晩期		台石1平	凹	24.1	15.5	—	—	14.5	4	—	—		佐藤和雄・他1997「七飯町鳴川右岸遺跡・桜町遺跡」(北海道埋蔵文化財センター調査報告書112)北海道埋蔵文化財センター	
	20				集石 S-18	早期～晩期		台石1凸・平	凹	(13)	13	—	—	—	—	14	5	—	—	
	21	図6-6	南館市	亀田中野遺跡	焼土 F-7	中期		台石1平・ 台石1平b	石冠・扁平石器 (3点)										古原敬剛・佐藤智彦1991「浜町A遺跡Ⅱ」戸井町教育委員会	
	22	図5-1			浜町 A遺跡	住居址 HP-26	前期後葉	円筒下層 d	台石1凹A	石冠	26	24	16	10.8	15	9	15	—		
	23		土籠郡木古内町	新道4遺跡	住居址 FH2東側	中期末	北筒	台石1凹b (2点)	扁平2点・ 磨2点	32 30	28 28	— —	— —	8.5 10.5	1.5 2.5	5.5 6	0.8 0.5		千葉英一・大沼忠春・他1987「建川2・新道4遺跡」(北海道埋蔵文化財センター調査報告書43)北海道埋蔵文化財センター	
	24	図6-5			住居址 FH2東側	中期末	北筒	台石1凹b (2点)	扁平2点・ 磨2点	32 30	28 28	— —	— —	— —	8.5 10.5	1.5 2.5	5.5 6	0.8 0.5		
25	図8-8	むつ市	高野川(3)遺跡	1号住居址	後期中葉	十腰内Ⅲ	台石1凹A	磨	17.4	13	17.4	13	11.8	9.1	11.8	9.1		北林八洲晴・新開敏・他1995「高野川(3)遺跡」(青森県埋蔵文化財調査報告書179)青森県埋蔵文化財調査センター		
26	図8-7			5号土坑	後期中葉	十腰内Ⅲ	台石1平b	磨+磨	31.2	20.3				12	6.4	—	—			
27	図9-1			13号住居址	後期中葉	十腰内Ⅲ	台石1凹A	磨	18	17	12	11.1	9.2	8.4	—	—	—		吉市豊司・高山昇・他1977「木木沢遺跡発掘調査報告書」(青森県埋蔵文化財調査報告書34)青森県埋蔵文化財調査センター	
28	図9-2			木木沢遺跡	3号住居址	後期中葉	十腰内Ⅲ	台石1平b	磨	25	13	25	13	11.7	7.7	—	—			大湯卓二・笹森一朗・他2007「木山(2)遺跡Ⅳ」(青森県埋蔵文化財調査報告書433)青森県埋蔵文化財調査センター
29				9号住居址	後期中葉	十腰内Ⅲ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			記載のみ
30		東津軽郡蓬田村	山田(2)遺跡	第1号竪・ 石器集中遺構	前期～中期		台石1凸A	凹+磨	30.5	20.5	20	16.3	9.7	5.5	9.7	5.5		小田川哲彦・他2010「山田(2)遺跡Ⅰ」(青森県埋蔵文化財調査報告書455)青森県埋蔵文化財調査センター		
31	図4-3	青森市	宮田館遺跡	集石遺構	前期初頭	長七谷地Ⅲ群	台石1平b (2点)	特殊磨石 (2点)	—	24	—	22	12.3	5	10.4	1.2		小笠原雅行・杉野淳子・他2003「宮田館遺跡Ⅲ・米山(2)遺跡Ⅱ」(青森県埋蔵文化財調査報告書344)青森県埋蔵文化財調査センター		
32	図8-9			米山(2)遺跡	2号住居址	後期後葉	十腰内Ⅳ	台石1平b	磨	28	26	19	13	11.5	8.5	10	7.5			
33		黒石市	一ノ渡遺跡	T-U15プラスコ 状土坑			石皿ⅡB	磨	50.5	26	20	10	11.2	9.8	11.2	9.8		一町田・一・高山昇・他1984「一ノ渡遺跡」(青森県埋蔵文化財調査報告書79)青森県教育委員会		
34				H13号組石	後期前葉	十腰内Ⅰ	台石1凹A	磨(2点)凹 (1点)	49	25	25	8		10 9.3	8.8 9.2	10 9.3	8.8 9.3			
35	図4-4	八戸市	湯野遺跡	40号住居址	前期初頭		台石1平b (2点)	特殊磨石 (2点)	39	22	39	22	14	6.5	7.5	1.5		中村哲也・佐々木雅裕・他2007「湯野遺跡Ⅱ」(青森県埋蔵文化財調査報告書431)青森県埋蔵文化財調査センター		

都道府県	番号	図番号	市町村	遺跡名	遺構名	主体時期	主体土器型式	石皿・石石類		磨石・砥石類		下石長		下石幅		下石使用		上石長		上石幅		備考	文献・所蔵
								分類	分類	下石長	下石幅	下石使用	下石使用	上石長	上石幅	上石使用	上石使用						
秋田県	36	図5-2a	鹿角郡小坂町	はりま館遺跡	住居址 SI007	前期後葉	円筒下層 d	台石 I 凹 b	扁平	37	31	37	31	19	2.5	15	1.2	大型住居内				柴田陽一郎・他1984「東北自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 X はりま館・横瀬・大谷遺跡」(秋田県文化財調査報告書 109) 秋田県埋蔵文化財センター	
	37	図5-2b				前期後葉	円筒下層 d	台石 I 凹 b	扁平	36	27	24.5	22	16	2.8	15	1.2	大型住居内					
岩手県	38	図9-3	八幡平市	上斗内Ⅲ遺跡	D12号住居址	後期中葉～末葉		台石 I 凹 b	凹	31	27	24	19	11.8	9	—	高橋与右衛門1984「上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書」(岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書 71) 岩手県埋蔵文化財センター						
宮城県	39	図9-4	柴田郡川崎町	向鹿遺跡	2号住居址	後期中葉	宝ヶ峯	台石 I 凸 b	凹	32.5	23	21	15.5	8	7.5	6.3	6	佐藤広史・斎藤吉弘1987「東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅱ 中ノ内 A 遺跡・本原敷遺跡他」(宮城県文化財調査報告書 120) 宮城県教育委員会					
福島県	40	図9-7	相馬郡飯館村	宮内 A 遺跡	6号住居址	後期中葉	加曾利 B	台石 I 凹 A	磨	45	38	14	8	12	7.3	12	7.3	鈴鹿良一・三品勝幸・他1989「真野ダム関連遺跡発掘調査報告書 X Ⅲ」(福島県文化財調査報告書 210) (財) 福島県文化財センター					
	41	図9-6				松ヶ平 D 遺跡	1号住居址	後期中葉	加曾利 B	台石 I 平	磨	—	—	—	—	12	10.6	12	10.6	村木亨・他1984「真野ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ」(福島県文化財調査報告書 129) (財) 福島県文化財センター			
	42	図6-7	双葉郡橋本町	馬場前遺跡	152号住居址	中期末	大木 10	台石 I 凸 蹴	凹	22.5	16.2	—	—	13	8.6	13	8.6	山内幹夫・吉田秀幸・他2003「馬場前遺跡(2・3次調査)」(福島県文化財調査報告書 398) (財) 福島県文化財センター					
	43	図6-8	二本松市	田地ヶ岡遺跡	14号住居址	中期末	大木 10	台石 I 平 A	磨・凹	60	34	29	19	10.5	9.5	10.5	9.5	日黒吉明・他1975「東北自動車道遺跡調査報告」福島県教育委員会					
	44	図9-5	郡山市	北向遺跡	18号住居址	晩期前葉	大洞 BC	台石 I 凹 A	磨・磨	49.2	37.1	30	21	15	11.3	8	2	只野幸彦・他1990「東北自動車道遺跡調査報告Ⅱ」(福島県文化財調査報告書 232) (財) 福島県文化財センター					
栃木県	45		宇都宮市	根古谷台遺跡	J-23号住居址	前期中葉	黒浜	石皿Ⅱ A	磨												函版のみ	梁木誠1988「聖山遺跡Ⅲ」(宇都宮市教育委員会 24) 宇都宮市教育委員会	
埼玉県	46	図5-4	深谷市	円阿弥遺跡	10号住居址	前期後葉	諸磯 a・b	台石 I 凹 b	磨(2点)	50	25	30	18	11.6	8.4	8	7	川口潤・利根川章彦・他1991「竹之花・下大塚・円阿弥遺跡」(埼玉県埋蔵文化財調査報告書 105) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団					
	47		新座市	新座遺跡	J-6号住居址	中期後葉	加曾利 E Ⅱ	石皿Ⅱ A + 多孔石	凹・磨	—	13	—	10	14	6	—	—	坂詰秀一編1965「跡見学園					
群馬県	48		利根郡昭和村	糸井宮前遺跡	132号住居址	前期後葉	諸磯	台石 I 凸?	磨												函版のみ	関根哲二・谷原保彦・他1985「糸井宮前Ⅲ」(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 14) (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団	
	49				136号住居址	前期後葉	諸磯	石皿Ⅱ A	磨												函版のみ		
	50				118号住居址	前期中葉	黒浜	台石 I 凸?	凹												函版のみ		
	51				81号住居址	前期中葉	黒浜	台石 I 凸 A	磨?												函版のみ		
	52	図5-3	利根郡みなかみ町	十二原Ⅱ遺跡	J-2号住居址	前期後葉	関山	石皿Ⅱ A	凹	32	33	24	19	14	9	14	9	菊池実・福1986「三原沢遺跡・十二原Ⅱ遺跡」(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団					
53		J-3号住居址	前期中葉		関山	凹												函版のみ・対応不明					
54	図5-11a 図5-11b	前橋市	今井三騎堂遺跡	36号住居址	前期後葉	諸磯 a	I 平 蹴	凹	—	—	—	—	12.6	9	9.6	7	石坂茂2006「今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡」(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 350) (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団						
55		伊勢崎市	菅野遺跡	住居址内	前期後葉	諸磯	石皿Ⅱ B	磨・磨石 蹴												伊勢崎市赤堀歴史民俗資料館 館ご告知			
千葉県	56	図3-3	君津市	睡ヶ作遺跡	SK051土坑	早期		台石 I 凹 A	磨・磨石 蹴	20.5	19	10	10	14.2	9	14.2	9	土屋治雄・他2006「東関東自動車道(本津東・宮津線)埋蔵文化財調査報告書6」(千葉県教育振興財団調査報告書 532) 財団法人千葉県教育振興財団					
	57	図7-5	松戸市	金輪台遺跡	1号住居址	後期初頭	株名寺	台石 I 平 b	磨	18	12	18	12	8.5	7	8.5	7	沼沢豊1974「松戸市金輪台遺跡」日本鉄道建設公団東京支社・千葉県都市公社					
	58	図7-1			2号住居址	中期後葉	加曾利 E	台石 I 凸	磨	19	18	—	—	8	6	4.6	3						
東京都	59		国分寺市	武蔵国分寺跡遺跡北方地区	遺物集中区 55	早期未カ		台石 I 凸 蹴	凹・蹴	17	16	—	—	8	7	—	福島宗人・中西亮・他2003「武蔵国分寺跡遺跡北方地区」(東京都埋蔵文化財センター調査報告書 136) 東京都埋蔵文化財センター						
	60	図3-5	多摩市	多摩ニュータウン No.52 遺跡		早期前半	熊糸文	台石 I 平 b (2点)	特殊磨石												小林達雄・他1966「多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ」東京都多摩ニュータウン調査会		
	61	図7-2	東久留米市	新山遺跡	1号住居址	中期後葉	加曾利 E Ⅳ	台石 I 凸	棒状磨	21.6	16.6	11.3	7.2	21.3	6	山崎丈・井口直司・他1981「新山遺跡」(東久留米市埋蔵文化財調査報告書 8)							
	62		川崎市	西菅遺跡第三地点	敷石遺構	中期後葉	加曾利 E Ⅳ	台石 I 平 A	磨・磨	(19.7)	17	18	17	9.5	6	—	—	西菅遺跡調査団 1976「川崎市多摩区西菅遺跡第三地点発掘調査報告」日本住宅公団					
	63				敷石遺構	中期後葉	加曾利 E Ⅳ	石皿Ⅱ A	磨												対応不明		
64	図6-9	横浜市	荏田第10遺跡	102号住居址	中期中葉	駒坂	台石 I 平 A	磨	17.4	16.3	17.4	16.3	9.4	7.6	9.4	7.6	坂上克弘1972「港北ニュータウン地域調査報告Ⅲ」横浜市埋蔵文化財調査委員会						
65	図6-10		当麻遺跡	56号住居址	中期後葉	加曾利 E 新	台石 I 凸 A	凹	19	16.4	13	9.6	10.3	8.1	9	6.8	白石浩之・山本隆久1977「当麻遺跡」(神奈川県埋蔵文化財調査報告 12) 神奈川県教育委員会						
神奈川県	66		相模原市	新戸遺跡	包含層	中期後葉		石皿Ⅱ A	凹	56	26	48	23	—	—	—	炭化材(クリ)種子 (オニグルミ)						
	67				J-3号住居址	中期後葉	加曾利 E	石皿Ⅱ A	磨石類	33	31	29	20	—	—	—	磨石は因示無						
	68		J-4号住居址	中期後葉	加曾利 E	台石 I	磨石類												記載のみ				
	69		J-5号住居址	中期後葉	加曾利 E Ⅲ	台石 I 凸	磨												8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8				
70	図5-8		吉岡遺跡群 D 区	J1号焼土址	早期～前期	子母口～関山	台石 I 凹	磨	—	24	—	19	13	8.5	—	—	白石浩之・加藤千恵子1996「吉岡遺跡群Ⅳ」(かながわ考古学財団調査報告 21) (かながわ考古学財団)						
71	図7-4	綾瀬市	早川天神森遺跡	3号住居址	中期後葉	曾利Ⅳ	石皿Ⅱ A	凹・磨	34	28	30	20	11	8	11	8	関本孝之・鈴木次郎・他1983「早川天神森遺跡」(神奈川県埋蔵文化財センター調査報告 2) 神奈川県埋蔵文化財センター						

都道府県	番号	図番号	市町村	遺跡名	遺構名	主体時期	主体土器型式	石皿・石皿類 分類	磨石・磨石類 分類	下石長	下石幅	下石使用 枚数	下石使用 枚数	上石長	上石幅	上石使用 枚数	備考	文献・所蔵	
神奈川県	72	図9-8	藤沢市	西富貝塚	1号住居址	後期中葉	加曾利B	石皿ⅡA	磨石・磨石類	33	23.5	22	15.5	11	8	11	8	寺田兼房1964「藤沢市文化財調査報告書1」藤沢市教育委員会	
	73	1号住居址			後期中葉	加曾利B	石皿ⅡA	磨石・磨石類	(28)	22	(22)	13	11	9	11	9			
	74	図3-6	茅ヶ崎市	白久保遺跡	Ⅸ層下層石器集中遺構	早期か		石皿ⅢA	磨石・磨石類	29	19.5	24	13	13	6	9	3.5	松田光太郎・井辺一徳・他1999「白久保遺跡」(かながわ考古学財団調査報告60)かながわ考古学財団	
	75	図9-9	伊勢原市	下北原遺跡	24号住居址	後期中葉	加曾利B	台石Ⅰ凹	磨石・磨石類	36	27	34	22	15	6.9	15	6.9	鈴木保彦1977「下北原遺跡」(神奈川県埋蔵文化財調査報告14)神奈川県教育委員会	
	76	図7-3	足柄上郡山北町	尾崎遺跡	20号住居址	中期後葉	曾利Ⅲ	石皿ⅡA	磨石	40	36	30	20	8.4	8.4	8.4	8.4	岡本孝之・他1977「尾崎遺跡」(神奈川県埋蔵文化財調査報告13)神奈川県教育委員会	
新潟県	77	図3-2	三条市	中土興入遺跡	遺物集中区	早期前半	押型文併行	台石Ⅰ平b(2点)	特殊磨石(6点)	38	26	34	20	19	5	16	1.2	金子正典・西川栄1984「中土興入遺跡」(下田文化財報告書16)下田教育委員会	
										25	19.5	25	16.5	18.5	6.5	12.5	0.1		
山梨県	78	図5-7	笛吹市	桂野遺跡	11号住居址	前期後葉	十三菩提	台石Ⅰ平b	特殊磨石	56	35	51	30	16	7	14	2.3	種子(オニグルミコナラ属)	
	79	図5-9			當代遺跡	1号住居址	前期後葉	十三菩提	台石Ⅰ平b	特殊磨石(4点)	44	40	32	32	22	6	13	0.2	野村幸和・網谷邦生2000「桂野遺跡(1～3次)」(山梨県埋蔵文化財センター調査報告書72)山梨県埋蔵文化財センター
	80	図5-5	寺平遺跡	2号住居址	前期後葉	諸磯b～十三菩提	台石Ⅰ平	凹・磨石	66	35	30	24	12.5	5	12.5	5	佐々木藤雄・編1986「小黒坂南遺跡群」(境川村埋蔵文化財調査報告書3)境川村教育委員会		
	81	図8-1	大月市	大月遺跡	A区4層2号焼土層	中期後葉	曾利	石皿ⅡC	磨石	33	27	30	20	9.5	8.5	9.5	8.5	笠原みゆき2000「大月遺跡(10次)」(山梨県埋蔵文化財センター調査報告書174)山梨県埋蔵文化財センター	
	82		北杜市	板橋遺跡	住居址	前期前葉		石皿ⅡC	磨石									千葉毅2010「山梨県北杜市板橋遺跡」『考古学研究』56巻4号 pp.102-104	
	83	図5-10	北安曇郡松川町	大門北遺跡	Dトレンチ2区	前期後葉	諸磯	石皿ⅡA	磨石・磨石2点か									藤原健一1964「有明山」(松川村教育委員会)	
長野県	84	図7-8	松本市	牛の川遺跡	B5住居址	中期後葉	曾利Ⅳ	石皿ⅡC	磨石	18.2	16	13.8	6.1	5.4	4.6	5.4	4.6	中島登博・他1980「松本市菅賀野の川遺跡」(松本市文化財調査報告書18)松本市教育委員会1980	
	85		塩尻市	山の神遺跡	1号住居址	中期中葉	猪沢	石皿ⅡC	磨石	38	32	31	14	11	8	11	8	大竹憲昭・三上徹也・他1988「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2」(長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書2)長野県埋蔵文化財センター	
	86	図4-7	坂平遺跡	坂平遺跡	9号住居址	前期初頭	中越	台石Ⅰ凸A	凹・磨石	45	35	—	—	15	9	15	6.3	小松隆文・樋口誠司2004「坂平」富士見町教育委員会	
	87	図4-6a			44号住居址	前期初頭	中越	台石Ⅰ凸A	凹・磨石	55	48	55	48	10.2	6	—	—		
	88	図4-6b			17号住居址	前期初頭	中越	台石Ⅰ凸A(3点)	凹・磨石	44	38	44	38	10	7.8	10	2.3		
	89	図4-5			24号住居址	前期初頭	下吉井・木島	台石Ⅰ凸A	磨石・磨石	55	42	55	42	14.3	8.5	10	5.3		
	90	図5-6	諏訪郡富士見町	中尾遺跡	検出面(土坑群周辺)	前期後葉～中期初頭	諸磯～十三菩提	石皿ⅡA	凹	45	37	45	37	17	10	12	2.8	小松隆文2001「長野県富士見町中尾遺跡の石皿」『山梨考古』19・山梨考古同好会	
	91		肌原遺跡	4号住居址	前期後葉	諸磯a・b	石皿ⅡA	凹	42	36	—	—	12.5	7	—	—	小林公明・他1983「肌原遺跡」『長野県史』考古資料編 主要遺跡(南信)		
	92		肌原三本松遺跡	37号住居址	早期前半	細久保	台石Ⅰ平A	磨石	35	25	30	16	15	8	14	7	樋口誠司・小松隆文1998「肌原三本松遺跡」富士見町教育委員会		
	93	図7-7	上伊那郡宮田町	高河原遺跡	2号住居址	中期後葉	加曾利E	台石Ⅰ平A	磨石	45	30	21	11	8	7	8	7	福沢幸一1971「長野県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 阿智・飯田」(宮田地区)長野県教育委員会	
	94	図7-6	伊那市	北丘B遺跡	2号住居址北壁	中期中葉	勝坂	石皿ⅡC(2点)	凹(2点)・凹・磨石(1点)	—	21.6	—	12	10	8	10	8	宮沢恒之1973「長野県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 伊那市西春近」長野県教育委員会	
	95	図4-8	駒ヶ根市	殿村遺跡	3号住居址	前期初頭	木島～有尾	台石Ⅰ凸A	磨石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	木下平八郎1990「反目・遊光・殿村・小林遺跡」(駒ヶ根市発掘調査報告書29)
	96	図7-9			日向坂遺跡	2号住居址	中期後葉	曾利Ⅱ	台石Ⅰ平A多孔石	凹	18	12	16.5	10	9.2	6.8	9.2	6.8	小原晃一1980「日向坂・赤須城・七免川A」駒ヶ根市教育委員会
岐阜県	97	図7-10	高山市	上岩野遺跡	SB1号住居址	中期後葉	曾利Ⅱ	石皿ⅡA	磨石	36	22	24	12	10	7.5	10	7.5	大宮次郎・上原貞昭・他2005「上岩野遺跡」(財)岐阜県教育財団文化財保護センター調査報告書90(財)岐阜県教育財団文化財保護センター	
	98	堂ノ上遺跡			36号住居址	中期初頭	梨久保	台石Ⅰ平A	凹										戸田哲也1997「堂ノ上遺跡」久々野町教育委員会
	99		四日市	塚原遺跡	住居址	中期後葉	不明	石皿ⅡA	磨石	27	22	—	17	11	9	11	9	澄田正一1964「濃飛山地に分布する石皿の機能について」『名古屋大学文学部研究論集』26・名古屋大学文学部	
	100	図3-15			市場遺跡	5層・包含層	早期後半	塚原主体	台石Ⅰ凸A	凹・磨石	43	30.5	36	25	—	7.7	—	—	他田誠志1987「市場遺跡発掘調査報告書」瀬戸町教育委員会
101		各務原市	蘇原東山遺跡	包含層	早期後半	入海Ⅱ・天神山	台石Ⅰ平	磨石									渡辺博人1999「蘇原東山遺跡群発掘調査報告書」各務原市埋蔵文化財調査センター		
静岡県	102	図3-7	沼津市	中見代第Ⅲ遺跡	住居址	早期前半	押型文	台石Ⅰ凹A	磨石・磨石	33	26	28	18	12.5	9	12.5	9	高尾好之1988「上手上・中見代Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書」(沼津市教育委員会発掘調査報告書42)沼津市教育委員会	
	103	図3-4	伊東市	三の原遺跡	包含層	早期前半	多縄文	台石Ⅰ平A	磨石	34	32	34	32	9.5	8	4	3	小磯学・山形真理子1991「三の原遺跡」立教学院三の原遺跡調査団	

都道府県	番号	図番号	市町村	遺跡名	遺構名	主体時期	主体土器型式	石皿・台石類 分類	磨石・敲石類 分類	下石長	下石幅	下石使用 枚数	下石使用 枚数	上石長	上石幅	上石使用 枚数	上石使用 枚数	備考	文献・所蔵
石川県	104		能美市	庄が塚敷 A 遺跡	1号住居址	中期前葉	新崎	台石 1 凸 A (10点)	磨 (6点) 磨 + 磨 (1点)										西野秀和・松山和彦・他1993「能美丘陵東遺跡群」石川県埋蔵文化財センター
	105			蒔生遺跡	第10配石址	中期中葉	古府	台石 1 凸											西野秀和1978「蒔生遺跡」辰田町教育委員会
	106	図8-2	白山市	桑島・東島遺跡	D-4区画ビッド群	中期後葉	古府～大杉谷	台石 1 凸 A	磨	50	34	125	95	122	116	122	116		高橋勝喜・中島俊一1976「白峰村桑島・東島遺跡発掘調査報告書」石川県教育委員会文化財保護課
愛知県	107		名古屋市長	牛牧遺跡	中央区城石村 ブロック	晩期		台石 1 凹											伊藤敬行・内山邦生・他1961「牛牧遺跡」守山市教育委員会
三重県	108	図9-13	いなべ市	覚正垣内遺跡	SK3土坑	後期初頭	中津	台石 1 凸 A (2点)・ 凸 b (1点)	磨	33 33 34	21 26 28	23 14 23	142 12 16	10	10	10	10		伊藤敬行・他1961「覚正垣内遺跡発掘調査報告書」(三重県埋蔵文化財調査報告186)三重県埋蔵文化財センター
	109	図9-10	東近江市	正楽寺遺跡	SK102土坑	後期前葉	北白川上層	台石 1 平 A	凹	161	129	15	5	94	91	—	—		榎田文雄・編1996「正楽寺遺跡」(能登町教育委員会調査報告書40)能登町教育委員会
滋賀県	110	図8-3	大津市	穴太遺跡	4号住居 落ち 込み	後期中葉	元住吉山	台石 1 平 A	磨 (4点) 凹 (2点)	32	28	19	12	10	8	10	8		榎田文雄・林博道・他1997「穴太遺跡発掘調査報告書」財団法人滋賀県埋蔵文化財保護協会
高知県	111	図3-10a	香美市	刈谷我野遺跡	遺物集中4	早期前半	無文・押型文	台石 1 凸 敲	凹+敲	25	22.5	—	—	14	10.5	—	—		松本安紀彦2005「刈谷我野遺跡1」(香北町埋蔵文化財発掘調査報告書3)香北町教育委員会
	112	図3-10b			遺物集中4	早期前半	無文・押型文	台石 1 凸 b	凹+磨	36	28	—	—	11	10	—	—		
長崎県	113	図9-12	壱岐市	名切遺跡	25号貯蔵穴	後期中葉	北久根山	台石 1 凹 A	磨+敲	33.5	24.5	13	12.5	10	9	10	9		安楽勉・他1985「名切遺跡」(長崎県調査報告書71)長崎県教育委員会
宮崎県	114	図9-11	宮崎市	竹ノ内遺跡	包含層	後期中葉	市来	台石 1 凸 b	磨	16	12	11	6	4	3.5	4	3.5		高山富雄・山田洋一郎2000「竹ノ内遺跡」(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書27)宮崎県埋蔵文化財センター
鹿児島県	115	図2-2	始良市	建昌城跡遺跡	A2区 第IV層	草創期 後半	無文	台石 1 凹 A	凹	—	26	—	12	10.5	9	7.5	5.5		下鶴弘・他2005「建昌城跡-発掘調査報告書」(始良町埋蔵文化財発掘調査報告書10)始良町教育委員会
	116	図5-12	垂水市	重田遺跡	7区 包含層 IV 層上層	前期中葉	曾畑	台石 1 凹	凹	42	32	42	32	13	10	13	10		羽生文彦・梶原剛2002「宮ノ前遺跡・重田遺跡」(垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書6)垂水市教育委員会
	117	図3-8	肝臓郡南大隅町	大中原遺跡	2号集積遺構	早期前半	吉田	台石 1 凸	磨+敲 (1点)・ 不明 (3点)					11	9	—	—		下大川司・前迫亮一2000「大中原遺跡」(鹿児島県肝臓郡南大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書9)南大隅町教育委員会
	118		南九州市	南田代遺跡	集石遺構 1号	前期前葉	森	台石 1 平 b	凹+磨 (2点) 磨 (1点)	35	30	25	20	9	9	7	7		彌栄久志・平木場秀男・他2005「南田代遺跡」(鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書88)鹿児島県立埋蔵文化財センター
	119	図3-9	指宿市	水迫遺跡	集石	早期前半	岩本	台石 1 凹 A	磨	32	28	16	12.5	11	9	11	7		下山寛・他2002「水迫遺跡2」(指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書35)指宿市教育委員会
	120	図2-1	熊毛郡中種子町	三角山 I 遺跡	V層	草創期	際常文	台石 1 平 b	磨	48	37	48	37	11	6	7	5		藤崎光洋・中村和英2006「三角山遺跡群(3)三角山 I 遺跡」(鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書96)鹿児島県立埋蔵文化財センター
121				II層	前期	森+曾畑	台石 1 平 b	磨石類 (3点)	46	25	41	20							磨石類の対応不明

計測単位は cm。計測値 () は残存値を示す。